

《公開講演会記録》

北朝鮮再訪記——変ったのか、変るのか

田畑 光永（当協会理事）



ピョンヤンにて

私は今年の5月と今年の9月に1週間ずつですが、北朝鮮を訪れました。そこで感じたことを、聞いていただきたいと思えます。専門家ではありませんから、見当違いもあるはずですが、それはあの国のこれからを見てゆく上で明らかになるでしょうから、遠慮なしに暴論を展開しようと思えます。

まず、なぜ北朝鮮に行きたいと思ったか。私は1977年から1980年にかけて、特派員として北京に駐在しました。その期間は1976年に周恩来、朱徳、毛沢東と中国革命を指導したビッグ3とも言うべき長老が相次いで世を去り、そこで華国鋒が毛沢東夫人の江青女史ら「四人組」を逮捕して、最高指導者の地位を引継いだところへ、鄧小平が3度目

の失脚から復活してきて、毛沢東路線を踏襲しようとする華国鋒をうまく追い落として、改革・開放路線に舵を切ることに成功した、そういう3年間でした。

その時の見聞は大変興味深いものでしたが、いずれ北朝鮮にも中国の路線転換に似た変革が訪れるであろうから、それを見る上で、変革前を見ておきたいというのが行きたかった理由です。

では、なぜ2度も行ったか。文革中の中国も分かりにくかったのですが、北朝鮮はそれに輪をかけて分かりにくい。去年は見たことは見たにしても、狐につままれたような気分です。帰ってきましたから、同じものでももう一度見てこようと思ったのです。

やはり2度行ってよかった。というの

は、その間に多少の変化があったからです。

去年は北京からピョンヤンへ飛んだのですが、今年は遼寧省の瀋陽から入りました。ですから空港は違うのですが、瀋陽空港で驚いたのはピョンヤン行きに乗る人たちの荷物の多さでした。家電やら雑貨やら、とにかく山のような荷物をカートに積んで行列している。どう見ても個人の旅行用の荷物というよりは、商売用という感じを受けました。去年の北京空港ではそういう印象はありませんでした。今年の光景は丁度、改革・開放が始まった頃の東京や香港の空港での中国行きのカウンター前の状況の再現でした。

それからやはり中国人団体が目立ちました。中国からの北朝鮮ツアーが本格

的に解禁になったのは、去年の春でしたが、数字はないもののものすごく増えていることは確かです。板門店の入口には、去年はなかった観光客用のみやげ物店が新設されていて中国人があふれています。たし、ピョンヤン市内のみやげ物店もお客の大半は中国人でしたから、北朝鮮ツアーは中国ではかなりポピュラーになっているのでしよう。勿論、欧米系の観光客も随分、目につきました。

両替のない不思議

観光客の増加を象徴するのがタクシーの登場です。といっても、以前からタクシーはあったのですが、去年は目につきませんでした。それが今年は結構な数がありました。流しもいました。市民も乗れるそうですが、主として観光客用だということ。これは、「2 kmの初乗り料金が1ドル」と米ドル建てになっていることで明らかです。われわれも去年は「米ドルも日本円も敵対国の通貨だからダメ、滞在費用はユーロで払え」と言われたのに、今年を実質的にはドルも円もOKということのようでした、口に出してそうは言いませんでしたが、なにしろタクシー料金がドル建てなのですから。

それにしても、何故タクシー料金がドル？ という疑問が湧くと思います。しかし、その疑問はあの国についてのもっと大きな疑問の一部にすぎません。もっと大きな疑問というのは、北朝鮮では外国人に自国通貨を持たせないのです。両替してくれないのです。それどころか、お札の顔を拝ませてもらえません。同行した仲間の中には頼み込んで見せてもらったという人もいましたが、私は信用がなかったのか、2度行っただのにあの国の現在のお金を見せてもらえませんでした。古い紙幣はお土産用に売られているのに。

これは不思議な政策です。外貨が欲しい国は外国人が持ち込んできたお金は自国通貨に両替させるのが普通です。それもなるべく使い切らせて、もう一度外国通貨へ戻して持ち帰られないように、再両替のレートを通利にしたりもします。ところが北朝鮮はそれをしません。ですから外国人が持ち込んできた通貨はそのまま街中へ出てゆきます。タクシーは勿論そうですが、土産物も食堂も。食堂といえはこのところイタリアン・レストランが人気ようで、われわれも去年とは違うお店に連れて行かれました。そういう所で外国人は持っている通貨で支払いをします。ですから土産物屋ではドル



イタリアン・レストラン

もユーロも人民元も日本円も、なんでもOKです。ユーロで買物をしてお釣は人民元ということも珍しくありません。どこかでは外貨を回収しているのでしょうか、外国人のお金はとりあえずそのまま街中に流れ出します。なんでも管理するのが大好きな国のはずなのに。

ですから両替不可にもかかわらず、ホテルのフロントには各国通貨と彼らのウォンとの交換比率というか換算表が掲示さ



ピョンヤン市内の露店

れています。おそらくその簡略版が土産物屋さんや食堂にあって、支払いやお釣の計算に使われているのだと思います。9月5日の換算表によりますと、ウォンと円との換算比率は日本円1円に対して1・2ウォンでした。したがって1ドルは96ウォン、1ユーロは136ウォン、1人民元は15ウォンといったところでした。勿論、売りと買い、現金とTCで出入りがあります。ざっとこんなところでした。びっくりしました。ウォンがひどく高く評価されています。なにしろ空

前の円高に見舞われている日本円の約8割の価値となります。現在、韓国のウォンは日本円1円に対して15ウォンくらいですから、北朝鮮のウォンのほうが10倍以上もの価値がある計算です。

外国人に両替させない、外貨が街中に流れるのを放置する、実勢とはかけ離れた換算表。これらがあの国で外国人がまず初めに感ずる疑問です。これについての私なりの解釈は後ほどお話ししようと思います。

建設ブーム？

さて街に眼を向けて見ましよう。先ほど、昨年と比べて多少の変化があったと言いましたが、外国人が増えたことほかに、街に活気が出てきたように感じました。たとえば昨年は街を走る車がほとんど乗用車とかバスとか、人の乗る車が多く、トラックとか貨物自動車とか物を運ぶ車が極端に少なかった印象があります。私は一度、何台に一台、そういう車に行き合いか勘定したことがあります。その時は30台目くらいでやっとトラックに出合いました。

また昨年はデパートをはじめ商店がほとんど閉まっていたましたが、今年は開い

ているところがかなりありました。昨年もほとんどに閉まっていたのかどうか分からないのですが、見たいといっても、デパートもダメ、一般商店もとにかくダメということでした。アパートの一階部分が商店になっているところが多いのですが、実際に人影をあまり見ませんでした。しかし、今年は様子が変わって商品が並んだ棚や人影が外から見えました。商店の前に飲食物のスタンドもありました。デパートも開いているようでした。理容室や美容室は花を飾ったりして営業していました。相変わらずどこの中は見せてもらえませんでした。動きの見えなかった去年に比べて普通に帰ったという感じを受けました。

その変化の理由はなにか。推測ですが、2つあるように思いました。1つは1992年の11月に実施したデノミ、彼らは「通貨交換」と言っていますが、それまでの通貨100に対し新通貨を1で交換する措置。それも1世帯あたり古い通貨10万ウォンまで（新通貨10000ウォンまで）に限るといふ思い切った貨幣流通量の縮小措置でしたが、後で登場する経済専門家も「かなり混乱があった」と認めていましたので、昨年はその後遺症がかなり残っていたのではないかと思います。

2つ目は、ご承知かと思いますが、来年2012年は故金日成主席の生誕100年、金正日総書記の生誕70年にあたる特別な年です。そこで北朝鮮ではかねてから来年を「強盛大国の大門を開く」年と位置づけて、建設の成果を誇示することを目指してきました。

しかし、現実を目論み通りにはいきそうもないので、最近では「強盛大国」といわず「強盛国家」と言い換えたりして、軌道修正を図っているようですが、ピョンヤンに限って言えば、来年4月の金日成主席の誕生日までに10万戸分の住宅を新築するということが、盛んに建設が進められています。そして実際にあちこちに真新しい、従来のアパートよりかなり外観も洒落た集合住宅ができています。つまり一種の建設ブームが起きていて、それが街に活気を呼んでいるように見えました。

それでは肝心の経済はどうなっているのでしょうか。勿論、旅行者に全体像がつかめるわけありませんから、先方の専門家の講義を聞くしかありません。昨年と同じ人から説明を受けたのですが、社会科学院経済研究所の李基成さんという一級研究士、教授、博士と3つも肩書を持つ人の話を聞きました。

まず昨年、この先生が説明した北朝鮮経済の現状から紹介したほうが分かりやすいと思います。

金日成主席が死去したのが1994年ですが、それから現在までの北朝鮮の経済は3つの段階に分かれるそうです。

第1段階は1995年から2000年まで。「苦難の行進に勝利し、しっかりと跳躍台を作った時期」

第2段階は2001年から2006年まで。「新しい転換期を迎え黎明の朝が明るくなった時期」

第3段階は2007年から2012年まで。「強盛大国の門を開く時期。経済が主攻戦線」

第1段階の「苦難の行進」というのは、1980年代末から90年代初めにかけてソ連東欧の社会主義圏が崩壊したことで、この地域からの援助やこの地域との取引に依拠していた北朝鮮経済は大きな打撃をうけ、苦しい境遇に立たされたことを言います。北朝鮮経済は基本的にまだそこから立ち直ってはいません。本当はまだ「苦難の行進」中です。

それは第3段階で掲げられた3つの目標の第1が「すべての分野で1980年代の過去の最高水準を突破すること」となっていることで明らかです。つまり多

くの分野がまだ20年以上前の水準に戻っていないのです。ちなみにあとの2つの目標は「技術集約型経済への転換」と「食糧、一次商品生産（生活必需物資）、住宅問題の画期的改善」です。

それでは実際のところ北朝鮮経済の現状はどの程度のものか、ということになります。

李基成氏はほんのわずかの数字しか教えてくれませんでした。それによると

▽GDPは2007年に163億6000万ドル、1人当たりでは638ドル（因みに過去最高は1988年の1人当たり2530ドルだった由）。

▽人口は2008年調査で2405万人。

▽食糧生産は2005年に545万トン。

▽自給できていない」（自給率は説明なし）

▽発電能力は1987年に616万kw。

「現在、能力は700万kw程度あるが、設備の保守・更新ができないので、その半分以下しか発電できていない」

マクロの数字はこれだけです。今年の講義ではもっと新しい数字が聞けるかと期待しましたが、GDPをはじめどれもこれ以上の数字はないと、答えてもらえません。しかも明らかにされた数字にしても、年がばらばらではなはだ扱



新しいアパート

にくい。たとえば07年のGDPを1人当たりの数字で割ると人口は2564万人となります。ところが08年の人口が2405万人だとすると、1年に150万人以上も減った計算になります。いくら食糧が足りないといっても、1年で人口が6%以上も減っては大変です。

しかし、李先生の顔を見ていて感じ取ったことは、ほかの年の数字がないわけではないのに言わないのは、どれもこれより悪いからだろうということです。GDPにしる、食糧生産にしる、最近ではこれが一番いい数字だと理解すれば、これらの数字も意味を持ってきます。

また電力についての説明は正直で有益です。「発電能力は700万kwだが実際

の発電量は半分以下」ですから、350万kwとしましょう。これを日本と比べてみますと、去る9月16日、電事連の八木会長は記者会見で「今年の夏の電力使用量のピークは8月10日の1億5659万kwで、去年より2100万kw少なかった」と述べています。つまり日本は約1億8000万kwを使った実績があることになります。人口では日本は北朝鮮の約5倍ですから、5で割ると3600万kw、北朝鮮の10倍強。逆に言えば北朝鮮は日本の10分の1以下です。経済活動の水準は大体見当がつかます。停電が多いのも無理はありません。

それでは今年の李先生はどんな講義をしてくれたか。

まず「強盛大国」について。「今は強盛大国を目指す攻撃戦の最後の段階が集中的におこなわれている」。しかし、「2012年末までに強盛大国の最終目標を完全達成するわけではなく、確固たる土台を築く」——これまでの「強盛大国の大門を開く」という言い方はいかにも「門を開いて強盛大国の中に入る」というニュアンスが強かったのですが、「確固たる土台を築く」のでは未だ先が長いわけで、目標を修正したことは明らかです。

問題の食糧生産については、「昨年は

自然災害の影響で食糧がある程度緊張した。今年には農業第一主義で、自給自足原則を守りつつ、12年には基本的に解決する」——「ある程度緊張」とは、かなり苦しかったということでしょう。それで「今年には種子革命、一毛作、ジャガイモ・大豆の栽培革命」を進めているが、夏の大雨で「一定の影響が心配される」とのこと。

電力については各地で大小の発電所の建設を進めているが、とくにピョンヤンの北120^キほどの所に熙川水力発電所を軍が建設し、1年半で完成させて、来年4月15日前に15万kw2基、計30万kwを発電すること。——聞いていて、保守不良の遊休発電設備が350万kw分もあるなら、新設よりそっちを修復するほうが先ではないかと、私は思いました。総じて、全体状況の説明はなく、特定分野、特定産業の成果を数字抜きで説明する（昔、文革時代の中国もそうでした）ことが多く、いくら聞いても「はい、そうですね」としか言いようがないお話でした。

ここで参考までに、専門家が北朝鮮経済についてよく引用する「韓国銀行の推計」を紹介しておきますと、北朝鮮経済は先ほどお話ししたような事情で「199

0年からマイナス成長が続いていたが99年には6・2%のプラス成長に転じ、その後は09年にマイナスに転落するまでほぼ2〜4%の成長を続けていた」ということです。そして「08年のGDPは248億ドル、1人当たりでは1065ドル」となっています。この数字は李先生が言った07年の数字と比べるとかなり高い。不思議な感じがしますが、いずれも政治的思惑をもった数字でしょうから、あまり気にしないことにしましょう。

「改革・開放」には反対

李先生に話を戻しますと、ここまではあまり新味はなかったのですが、質問が「改革・開放」に及ぶとなかなか興味深い話が聞けました。

昨年の5月、金正日総書記は中国を訪問しました。その後、発表されたコミュニケーションでは中国の温家宝首相は金正日総書記に中国の改革・開放の経験を紹介したいと言いい、金総書記のほうも中国との意思疎通を強め、協力を進めたいと応じたとなつています。ただこれは中国側の発表で、北朝鮮の『労働新聞』は改革・開放のくだりを載せなかったといわれますから、その後の北朝鮮の実際の政策が注

目されました。

そしてこれまでのところ、北朝鮮は対外開放政策を積極的に進めているように見えます。昨年末には北東部の羅先(ラソン)特別市を中心に「羅先共同開発区域」を設置し、中国、ロシアと結ぶ高速道路や鉄道の建設が急ピッチで進み、ロシアのハサンにつながる鉄道はつい先日、10月12日に開通式が行われました。中国への高速道路も今年中に開通するとのことです。

今年の6月には北西部の中朝国境である鴨緑江の中州の島・黄金坪(ファンゲムピョン)に中朝両国で共同開発する工業団地、「中朝経済合作区」の着工式が行われました。それに先立つ4月には南部の軍事境界線近くの金剛山地域を「国際観光特区」とすることを決めました。そしてつい最近も最北端・咸鏡北道の日本海側にある七宝山という景勝地へ観光列車が開通したというニュースがありました。

こうした動きが増えた観光客、さらに空港で目撃した家電その他の貨物の山を結び合わせて考えると、北朝鮮もついに「改革・開放」へ踏み切ったかと考えたくなります。

李先生の言うところでは「われわれは別に対外経済交流を否定するわけではな

い」、「先進技術を取り入れて、われわれにないもの、足りないものを補い、自主経済の発展に役立てると同時に、世界市場でわれわれが有利な地位を占めている鉛、亜鉛、マグネサイト、黒鉛などの生産を拡大し、一方、陶磁器、絹、高麗菜など伝統的産品の輸出にも力を入れる。外国との合弁、合作を進めるし、経済開発区域の整備にも力を入れている。さらにロシアからの天然ガスのガス管敷設にも好ましい展望を得ている」とのことです。

また北朝鮮には「大豊国際投資グループ」という外国からの投資を誘致する機関がありますが、そこが今年1月、「国家経済開発10カ年計画」というのを発表したと李先生自ら説明してくれました。その内容は

- 1、インフラ整備(鉄道、高速道路、空港の改造・新設、港湾整備)
- 2、エネルギー関連(炭鉱、発電所、送電網の開発、整備)
- 3、農業基礎建設(種子地区建設、総合農業機械工場建設、畜産・肥料工場建設)
- 4、工業地区建設(ピョンヤン先端科学基地、南方食品加工基地、清津重工業基地)

の4部門に外国からの投資を受け入れよ



金正日総書記と後継者の金正恩氏

うという計画です。

ところが、これを説明した後、李先生は妙な一言をつけ加えました。「これは人民経済の発展に関係するものではありません」と。耳を疑いました。

私は「改革はともかく、これこそ開放政策ではないのですか」と質問しました。答えは明快でした。「われわれは改革・開放に反対し、社会主義計画経済を固守します」とにべもありません。

そして「われわれに反対する帝国主義者が言う改革・開放とは自由化だ。われ

われを資本主義化しようとしているのだ」と言いますから、誰かがいい質問をし

ました。「いや、帝国主義者が言っているのではなくて、中国が言っているのではないですか」と。それへの答えは「中国が改革・開放を要求しているとは聞いていない」。どうも話がかみ合いません。

それにしても対外経済が「人民経済の発展に関係するものではない」とはどういう意味でしょうか。これも後で考えます。

話題は配給制度と市場経済の関係に移りました。すると今度は李先生と一緒に来て、それまで黙っていたやや若い研究者(名前を聞く時間がありませんでした)が、「私から」と言って、説明を始めました。

「共和国では国营機関で生産されたものを国营の商業ルートを通じて国定価格で供給するシステムが確立されている。(民間の)市場は国家の商品では完全にまかないきれない一部の消費財を補足する補助的な空間である。市場での売買は原則的に農民たちが自留地で作ったものを持って来たり、個人的に飼っている鶏とか卵とか、その他の畜産物、それから個人が外国などで手に入れたものを市場を利用して販売して、収入を得るとい

ものである」

「共和国では商業は注文制による管理運営方式だ。人民の生活を一番よく知っている地域の人民委員会が人民が必要とするものを提起し、商業網がそれを把握して中央に提出して、それが軽工業部門に反映されて、生産に結び付けられる。」

私には前段の説明と空港での光景があまりにうまく重なるので、念のため「個人が外国から持ち込んだものを市場で売ってもいいのか」と確認しますと、「旅行者が個人的に手にいれてくる品物は国が作る消費財の量とは比べ物にならないのだから、かまわない」とのこと。

配給制のことを彼らは「供給制」と言います。生活必需物資は政府が供給を保障し、値段はついているにしても、地域の商店、彼らのいう「商業網」を通じて地域住民に行き渡るようにする、というのが建前で、商品の種類によってそれぞれ「切符」があるとのこと。

その制度は建前通りに機能してきたのか、機能しているのか、が問題ですが、説明は「消費財の供給に困ったこともあったが、それだからこそ軽工業に力を入れ、技術革新に努力している。国营の商品流通量が増えたので、この2年間に市場での商品流通はだいぶ減った。われわれは

供給制度を堅持する」というものでした。「供給に困ったこともあった」というのは、実質的に供給ができなかったというところでしょから、それが外部には「配給制度廃止」と伝えられたのでしょ。しかし、彼らはこれからも「供給制」を国民の消費生活の柱と位置づけているようでした。

「デノミ」のからくり

さて、以上が経済についてわれわれが聞いた「講義」のおおよそです。この内容とわれわれの見聞とをどう統一して、北朝鮮の現状を1つのイメージにまとめるか、が次の問題です。

それにはどうしても一昨年11月に実施され、当時、「失敗した」と伝えられた、いわゆる「デノミ」をあらためて見直すことが必要だと思えます。

あの「デノミ」については、いまだに分からない部分がありますが、『北朝鮮入門』（磯崎敦仁・澤田克己共著、東洋経済新報社・2010年）という本に、比較的詳しい説明があります（120頁）ので、それを拝借しますと、「①交換期間は09年11月30日から12月6日までの1週間、②交換比率は100対1だが、貯

金は10対1と優遇する、③期間内に交換できなかった旧貨幣は無効になる、④物価水準は七・一措置時点の水準に戻す、⑤賃金の額面は変わらない（旧貨幣で月給1000ウォンだった人は新貨幣でも月給1000ウォンになる）、⑥商店や食堂での外貨使用を禁止する」というものです。なお交換限度額は1世帯あたり10万ウォンまでとされました。（④の七・一措置というのは2002年7月1日に実施された経済管理改善措置のことで、当初は闇取引を統制するための措置だったが、後に公認市場が各地に設置され、富裕層が生まれる一方で物価が上昇した）これはデノミではありません。また北朝鮮政府が言うようなたんなる「通貨交換」でもありません。これは政府による裕福な国民の財産の没収です。同書によりますと、当時、米1kgが2000ウォン程度だったそうですから、どんなお金持ちも現金は米50kg程度分を超える額は「無効」とされてしまったのです。貯金は交換比率で優遇されていますが、北朝鮮では貯金は自由に引き出せないの、たんす預金も普通とのこと。

一方、賃金は新貨幣でも旧貨幣と同額をもらえるのですから、理屈の上では100倍の賃上げですが、物価水準も20

02年当時の旧貨幣の値段に戻すだけですから、それ以降に上昇した分は下がるにしても、100分の1に下がるわけはありません。

なぜこんな乱暴なことをしたのでしょか。通貨の流通量を減らすためとしか考えられません。国民の手持ちのお金が少なくなれば、闇取引も下火になるでしょうし、闇市場へ流れていた商品も国営の流通ルートに戻るはず。

それに李先生は去年の「講義」で、この「通貨交換」措置についてこんなことも言っていました。政府の収入が足りなくても、経費は増えるからどうしても予算は膨らむ。すると物価が上がるので、通貨の流通量を減らさなければならぬのだ、と。

ピョンヤンは建設ブームだと言いました。来年に向けて新しい高層住宅が10万户分も建てられています。そのお金はどこから出て来たのでしょうか。シヨウ・ウインドウといわれるピョンヤンの街でも、多くの集合住宅が古ぼけて、塗装がひび割れたりしていますし、路面電車やバスの車体も驚くほど古いものが走っています。いかにも財政の苦しきを感じさせますが、そこにはわかぬの公共建設ブームです。「通貨交換」によって、貨幣の流通

量が減り、政府は物価をそれほど心配せずに紙幣を印刷できるようになったからではないでしょうか。あくまで私の推測ですが、そうとしか考えられません。

財政が苦しいからといって貨幣を野放図に発行すればたちまち悪性インフレに見舞われます。それを防ぐために国民からお金を取り上げてしまふのはいい方法です。しかし、これはいくらなんでも禁じ手でしょう。国民は政府を信頼しているから、貨幣が流通するのです。自分の才覚で貯めたお金を突如、紙切れにされてはそれこそたまったものではありません。

昨年5月にはピョンヤンの商店が火の消えたようだったのは、その混乱の後遺症だったのでしょうか。そして今年、若い研究員が「国営の商品流通量が増えたので、この2年間に市場での商品流通はいぶ減った」と言ったのは、本当は言葉の順序が逆で「(民のお金を吸い上げた結果)市場での商品流通がだいぶ減ったので、国営の商品流通量が増えた」と言うべきところだと思います。「供給制の堅持」を口にする事ができるようになったのだらうと思います。

彼らが今頃なお「供給制の堅持」を言うのは、貨幣経済の原則に従ってはいませんが、貨幣経済の原則に従ってはいませんが、貨幣経済の運営ができない。俗に言

えば「勘定が合わない」。そこで従来からの配給制度、つまり「供給制」の名のもとに実物経済の要素を大きくしようとしているのではないか、これも私の推測です。1970年代にカンボジアのポト政権は貨幣を廃止しましたが、あそこまではいかなくとも、あれに似た発想があるように思います。

2年前の「通貨交換」は貨幣の機能の大事な1つである「価値の保全」を否定しました。残る機能は「交換の仲立ちと価値の目安」でしょうか。そう考えれば、先ほど提起した疑問、つまり外貨とウォンを交換させない不思議の理由が分かります。ウォンはすでに貨幣としての適格性に欠けているのです。政府はこれからも必要に応じて勝手にウォンを増発し、増えすぎたなと思えば、また2年前のように没収するでしょう。それをするにはウォンを外国通貨とリンクさせてはなりませんし、外国人に持たせてもいけません。ウォンはあくまでも国内だけの「貨幣もどき」にすぎないのです。しかし、先ほど紹介した「貨幣交換」の内容の⑥に「商店や食堂での外貨使用を禁止する」という1項があります。これと私の解釈とは矛盾します。推測の上で推測を重ねなければならぬのですが、

おそらく当初は外貨管理をきちんとするつもりだったのでしょう。しかし、「貨幣交換」実施後の混乱の中で、外国人にウォンを持たせることで生じる摩擦や危険に気づいて、それよりは街に旅行者の外貨が出回る弊害のほうが小さいと判断して、交換停止に踏み切ったのではないのでしょうか。

「開放」政策の実態

「通貨交換」以降の北朝鮮経済をこのように捉える根拠の1つは、経済開発区の設置や「国家経済開発10カ年計画」について、先ほどご紹介した「これは人民経済の発展に関係するものではありません」という李先生の一言です。耳を疑ったと言いましたが、これだけ外国から投資を呼び込もうとしているのに、それが「人民経済の発展に無関係」とはどういうことなのか。首をひねりました。

結局、これから盛んになろうとしている中国やロシア、その他の国との交流、取引とドメスティックな国民経済を完全に分離すること以外には考えられません。前例がないわけではありません。軍事境界線に近い開城に設けられている韓国の工業団地は全く周囲から切り離

されていると言われます。われわれもできれば見たいと思いましたが、見学は認められませんでした。

外国から進出してきた企業に土地その他のインフラと労働力を提供し、見返りに雇用機会と技術を得るという形で、進出企業を国民経済の中に取り込んで自らの経済を発展させるという中国の改革・開放の方式とはまるで違うことを考えているようです。

北朝鮮が羅津港を中国やロシアに貸したり、鉱山の開発権を売ったり、開発区に工場を建てさせたり、あるいはロシアから韓国へのガス・パイプラインを敷設してその設置料を取ったりという「開放」政策の果実は金正日総書記を頂点とする支配集団の懐へ直行するのでしょうか。国民の経済活動とは別勘定にプールされるのだとすれば、「人民経済の発展とは無関係」ですし、「われわれは改革・開放には反対する」ということも矛盾しません。

よく「金王朝」と言われますが、なるほど封建王朝の家産制国家そのものですし、労働党と朝鮮人民軍はそれを支える家産官僚制ということになります。とすれば、いかにも奇妙に感じた外貨政策も内外経済の有機的結合を阻止するための

必然の措置と見えてきます。

今回の訪問は9月でしたので、毎年恒例になっている「アリラン」の公演も見ることができましたし、9月9日の建国記念日には軍事パレードも見ることもできました。どちらも金日成、金正日、そして新たにその系譜に連なった金正恩という支配者たちを讃美し、彼らに忠誠を誓うための大規模なイベントでした。それはここまでやるかため息が出るほどの、徹底した崇拜ぶりで、外国人がとやかく言うことではないとはいえ、われわれにはどうしても違和感なしには見られません。



アリラン公演

ただ旅行中の見聞から私なりに下した結論から言えば、われわれの社会での生活上の安心の拠り所の大きな一つとなっているお金は、この国ではその役割を果さないわけですから、権力者に忠誠を誓い、またそれを他人に見せ続けることだけが、不幸を避ける唯一の手段なのかもしれないと思えて来ました。イベントにおける崇拜ぶりの真剣さには、その意味で偽りはないのかもしれませんが。

というわけで、中国の改革・開放と比較するには北朝鮮はあまりに特異です。簡単にいずれば中国の道を歩むと予測することはできません。同時にもし私の推論が当たっているとしたら、今のやり方にはやはり無理があります。長続きするとは思えません。その転換がいつどういう形で起こるか、それはなんとも分かりません。

(10月21日・アジア研究懇話会)

講師略歴(たばた みつな)

1935年東京都生まれ。

1960年東京外国語大学卒。

東京放送入社。北京、香港特派員。

1996年神奈川大学教授(06年)。

当協会理事。著書『鄧小平の遺産』

『中国を知る』など。